

パネル討論 15:30～16:55 「20年後の社会を見据えた科学技術人材の育成」

パネリスト：

原山優子 氏（総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員）

堀井秀之 氏（東京大学大学院工学系研究科 教授）

辻村 学 氏（株式会社 荏原製作所取締役執行役専務）

コーディネーター：廣瀬 壮一（コンソーシアム副代表）

## 論点 1： 20年後の我が国の未来社会像

「20年後」という設定は、今の小学生が社会で活躍する頃という位置づけである。今日の情勢を考えるに、未来は不確実であるということは確定している。そのような状況での我が国の未来社会像とは、課題を解決しながら、いずれの地域の誰もがセカンドライフあるいはアクティブライフを享受できる社会を構築することではないか？

[雇用の確保は？] 時代とともに、求められるスキルが変わり、働くことの意義や人(科学技術者)の存在することの意味についてもパラダイムシフトが起こるのではないか。その意味で、科学技術が進展したとしても雇用についてそう心配する必要はないだろう。もちろん、変化に対する個人の努力は必要。

[戦争になれば未来社会像の議論も泡となる可能性もあることから) 軍事研究についてどのように考えるか？] サイエンスとしての研究はあるべき。どのような技術も転用可能であることを考慮すると、時世に流されず、倫理の軸をぶれないことが重要。

## 論点 2： 我が国の未来社会像と人材育成について

キーワードはダイバシティ、イノベーション。

日本はこれまで効率を追求してきた。これからは多様性を受容し尊重するような教育が必要。

多様性を体験できる機会を提供することが必要。体験前後では明確な違いがある。

[女性の活躍をもっと推進すべきでは？] 科学技術分野における女性の活躍推進についてはたゆまない努力が必要。女性のみならず、シニアの活躍にも目を向けるべき。

[基礎知識やスキルの重要性は？] もちろん基礎は必須。それをイノベーションに活用する成功体験までを経験させることが重要ではないか。品良くはみ出ることや、心地良さを壊すことを学習することも大切ではないか。なお、ここでいうイノベーションとは、科学技術の変革に限定したものではなく、何事においても新しいアイデアから新たな価値を生み出す変革という、イノベーション本来の広い意味に解するものである。

[初等教育での多様性教育は？] 多様性を受入れるには相当な努力が必要で、多様性教育は年齢に関係ない。とにかく体験させることが大事。初等教育での多様性教育の取組みの実践例もある。

社会全体によるサポートも考えるべき。

後で頂いたコメント： [工学分野におけるコンテストを創設できないか？

農学、生命、科学分野には多くのコンテストがあるが、工学分野の国内コンテストは少ない。]

[ ]は参加者からの質問。